魔法世界と高校生

藤枝夏彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法世界と高校生

【Ｎコード】

Ｎ４０９９Ｚ

【作者名】

藤枝夏彦

【あらすじ】

２０３０年

現代の魔法はかなり手軽なものになり誰でも使用出来るようになった。

登校

最初に

「魔法」

魔法とは呪文を唱えてたりして行うが、この世界では違う。
魔法を使用するには魔法結晶石(まほうけっしょせき)が必要となる。
魔法結晶石とは魔力が込められた結晶石である。
人間は誰でも魔力を所持している。だが魔力を所持しているだけでは魔法は使用は出来ないのである。
魔法を使用するにはおのれ自身の魔力を魔法結晶石(まほうけっしょせき)で変換する必要があるのだ。
けれど魔法結晶石も無限で使える訳でも無い。　例えるなら拳銃とかと同じで残弾数が無くなると使用出来なくなるのである。
使用出来なくなった「魔法結晶石(まほうけっしょうせき)」は専門のショップに持っていき補充する必要がある。
補充するにはショップへ行き己自身の魔力を魔法結晶石(まほうけっしょせき)に変換すれば再び使用する事が出来る。
魔法結晶石を使用した魔法にも種類があり主に火水風雷土光の６種類と補助魔法に分けられる。
基本攻撃系魔法は６種類の中の１種類しか使えないが補助魔法は別で誰でも気軽に使用する事ができる。
今、この世界には４つの魔法高校が存在する。
ヨーロッパ、ロシア、アメリカ、日本の４校である。
このいずれかの高校を卒業すると国家公務員クラスの待遇を受ける事が出来るので毎年何万人もの受験生がいるのである。
これがこの世界における魔法である。

「４月１５日」

日本魔法騎士学校これが今日から俺が通う魔法高校。　といっても１週間前が入学式
なのであるが手続きの問題上入学式には出れず、今日が初登校になる。
なのだが完全に寝坊してしまい急いで学校に向かっている途中である。
「やばい！やばい！完全に遅刻コースだ！」
「俺ちゃんと目覚ましかけたはずなのに・・・」
髪の色は漆黒の黒、髪の長さはやや長めで目にかかる位、制服を少し着崩して着ている
「志木野春樹（しきのはるき）」
は通学路を走りながら自分の制服のポケットに入っていた携帯を確認すると
「電源入ってねえじゃねーかよ！」
と一人で叫び
「参ったな、入学式に出れなかったし、今日が初登校になるのに初日から遅刻かよ」
っと春樹は最初こそは急いで走っていたが走るにつれ確実にペースが落ちていた。
「はぁ、はぁ、はぁー」
春樹は息を切らしながら
「あーだめだキツイ諦めるか。」
っと完全に走ることを諦め歩き出し
（体力落ちたな～運動不足かな。ここの学校受かる為に勉強ばっかしてたしな。）

とか
（この学校どんだけ広いんだよ）
っと思いながら春樹は学校への道を歩いていた。
ちなみにこの学校の広さは半径１０キロにも及ぶ広大な学校である。
　この敷地内に学生寮
があるのだが校舎は中央にあり学生寮は東の端にある。　一応自転車通学も可能であるが
春樹は持っていないので徒歩になる。
（８時１５分か～　えーと確かＨＲは８時半だったよな。まだここからだと２０分位掛かるな）
と思いながら通学路を歩いていると、自分と同じように歩いている女生徒がいた。
（俺と一緒の遅刻組みかな～）
っとか心の中で思いながら歩いていると前を歩いていた女生徒がいきなり立ち止まりすぐ傍にあった桜を眺めだした。
「・・・・・・・・・・・・綺麗」
っとその生徒は小さく呟いた。後ろを歩いていた春樹は
「綺麗ってもう桜の花も大分散ってるぜ」
っと春樹はその女生徒に話しかけていた。
「えっ？」
と言い少し驚いた女生徒はこちらを振り返った。　その女生徒は長い黒髪に二重瞼で凄く
綺麗で大和撫子と言う言葉が凄く似合う少女であった。
「あ、いやゴメン」
っと春樹は
（あれ？なんで俺今話しかけたんだろ。）
「うんうんいいの確かに桜もかなり散っちゃてるし・・・」
「でも私って桜観たのって初めてなの。」
っと女生徒は少し寂しそうな顔で答えた。
「いいの？このままじゃと授業に間に合わないよ」

っと女生徒が春樹に話しかけてきた。
「おっとそうだそうだ」
さすがにこれ以上遅刻はヤバイと思った春樹は
「じゃあ俺先行くわ。」
「君はいいの？」
春樹はそう女生徒に」尋ねると
「うん。私はもうちょっと桜を観てから行くから。」
「わかった。じゃ先に行くわ。」
といい別れ際に
「あ、俺志木野春樹ていうんだ学校で会ったらよろしくな。」
っと女生徒に言うと
「うん。よろしく私は冬野雪音（ふゆのゆきね）」
っと彼女が答えてくれたので春樹は手を振って別れた。

8時45分

春樹はどうにか学校にたどり着き下駄箱で上靴に履き替えて春樹は廊下を歩いていた。まだ廊下
には生徒が何人かいておそらくHRが終わったばかりなのであろう。
その中で春樹は
（え～っと職員室だよなってぇ職員室て何処だよ。くそぉ学校の中も広すぎだ。）
っと思い広い校内を歩いていると
「おぉいぃ！！」
と後ろから怒号をいわれ振り返ると
「おい！お前1年だろ！なんでこっちの校舎歩いていやがる！」
と金髪ピアスの男がこちらに歩み寄ってきた。　近くにいた女生徒達は口々に

「やばいよ。あの子」
や
「1年生だからここのルール知らないのかな？」
「私、先生呼んでくる。」
などと、周りにいた女生徒達はちょとしたパニックになっていた。
春樹は
（初日から最悪だ～まさか絡まれるとは・・・　俺的には目立ちたくないんだが・・・）
っとか考えているとその金髪ピアスの男子生徒が春樹の前まで来て
「おい！聞いてんのか！」
っと怒号を飛ばしてくる。春樹はこれ以上絡まれても面倒なので
「はい、聞いています」
っと答え
「すいません。今日から初登校なんで職員室を探していたら間違えてこっちの校舎に入ってしまったんです。」
春樹が素直に謝ると金髪の男子生徒は
「ちっ」
と舌打ちをして
「職員室は向こうの校舎だ。さっさと行け」
と金髪男子生徒に言われた春樹は「ペッコ」
と1度頭を下げその場を後にした。

登校（後書き）

初小説になります。

初登校そして出会い2

春樹は金髪ピアス男子生徒にいわれた校舎に行くとすぐに職員室が見つかり、春樹は
「あっここか」
「コンコン」
と2回職員室の扉をノックし
「失礼します」
っといい春樹は職員室の中に入っていった。
職員室の中はまるで図書館のようで魔道書や参考書などが積み上げられ本当
に職員室か？と思う程である。春樹はすぐ傍にいたの男性教諭に
「あの～すみません」
っと声をかけ
「今日からここの学校でお世話になります。志木野春樹（しきのはるき）です。」
っと男性教諭に挨拶すると
「あぁ1年生の子かぁちょっと待って」
角刈りでいかにも体育教師丸出しな男性教諭が大きな声で
「二条先生、二条先生、先生の所の生徒がやっと着ましたよ」
と呼ぶと奥の本の山の方から
「は～い今行きます。」
っと奥の本の山から淡い栗色の茶色の髪で腰くらいまでの長さの髪でかなり童顔身長も春樹よりかなり低くまるで同い年の同級生みたいな女性出てきて
「あ～君が志木野春樹君ね。ようこそ魔法騎士高校へ。あたしは君の担任の二条未来（にじょうみらい）よろしくね。　科目は魔法学ね
　ってか来るの遅いよ志木野君もうＨＲ終わっちゃてるからね。」
っ少し怒り気味で春樹に近づき
「志木野君次遅刻したらぶん殴るよ」

満面の笑みで拳を握り怖い事を言ってきた。
（教師が生徒をぶん殴るって。　いいのかよ・・・）
春樹が苦笑しながらそんな事を考えていると
「じゃあ1限目あたしの授業だからその時にクラスの皆に紹介するね　あっ志木野君の
クラスは１－４だから」
「あっ、ちなみにランクはＦね。」
と担任の二条が笑いながら言ってきたので
春樹はコクンと頷き
「はい、わかりました。」
と答えた。
「じゃあちょっとあたし授業の準備してるからそこでちょっと待っててね。」
といいまた担任の二条は本の山へ消えていった。

（Ｆランクねぇ・・・まぁ俺の今の状態だったらＦランクがいい所だよな・・・
まぁその方がいいか目立たなくて・・・色々と・・・）
春樹は「くすっと」誰にも気づかれないくらいの笑みを浮かべた。

その場で待たされ待つ事５分程で担任の二条未来が片手に教科書も持って現れ
「いやぁお待たせお待たせじゃあ志木野君教室行こっか」
っと二条がいい
「あっ、はい」
と春樹は答えた。
教室に向かう途中で春樹は二条に
「そういえば先生は魔法ランクはいくつなんですか？」
そう聞く右手を腰にあて二条は笑いながら
「あっは　あたしのランクはＢランクだよ」

っと胸を張っていってきた

「魔法ランク」

とはＳランクからＦランクの7段階で決められ、この世界でもＳランクの魔道師は１０人しかいないこの１０人は「大魔道師（だいまどうし）」と呼ばれている。　主にこの世界を動かしている人間がこの１０人である。

「Ａランク魔道師」

このＡランク魔道師でも１００人程しかいない。その殆どが魔法騎士（きし）である。

「魔法騎士（まほうきし）」

とは魔法が使える警察みたいな者である。　ちなみにこの「魔法騎士」に席を置くにはかなりの至難であり超エリートでも必ず入れるものではない。

「Ｂランク」

だからこのＢランクでも世間一般ではエリートなのである。

Ｆランクとはその中でも1番下なので使える魔法の種類も一般人のそれとほぼ変わらない位である。　この学校では最低でも卒業までにはＣランク魔道師になれる様に教育が行われる。

「あ、志木野君教室ここだよ。」

どうやらここが教室らしい。廊下の一番端の教室に１－４と書かれたプレート

そして、

「春樹の運命を大きくかえる事になる者達に出会う。」

初登校そして出会い２（後書き）

今回は少し短いです・・・

初登校そして出会い3

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「先生、あの子が入試の時の模擬戦闘でアレックス先生を倒した子ですか？」
中年で眼鏡を掛けた教師が職員室でマイカップでコーヒーを飲みながら角刈り体育教師にそう尋ねた。
ちなみにこのアレックスと言う教師だが学生時代ボクシングの選手だったらしい。
「ええ、そうらしいですね。　私はその場に居なかったんですが、教官をしていた二条先生が
言ってたんですが、凄かったらしいですよ。」
角刈り体育教師が二カーと笑いながら答え
「あのアレックス先生を一発で倒したんですよ。　私も一度戦ってみたいですよ。」
と角刈り体育教師が言うと
「いや、いや先生が戦っちゃ駄目でしょ　けが人がでちゃいますよ」
と、中年眼鏡教師は笑いながら答え
「まぁ、そうですよね　あっはは」
角刈り教師と中年眼鏡教師の笑い声が職員室に響いた。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「おーい、じゃあみんなー席に着いて授業始めるよー」
担任の二条未来（にじょうみらい）は手に持っていた教科書を手でポンポン叩きながら教室のちょうど

真ん中にある教壇の前に立つとそれまで自分の席から離れていた生徒達が
「はーい」
といいながらそれぞれの席に戻って行き全員自分の席に着くと担任の二条未来が
「授業始める前に皆にお知らせあるよー　」
二条未来が笑顔で生徒達に言うと一番後ろの席座る短髪の生徒藤峰蓮司(ねれんじ)が
「この授業前の発表ゆうたら・・・まさか未来ちゃん転校生かー？」
関西弁で短髪の藤峰蓮司が生徒が立ち上がり嬉しそうに聞くと
担任の二条未来は胸の前で腕をクロスにさせて
「はーい残念。　転校生じゃ無いよ。」
と答えると、関西弁短髪男子生徒藤峰蓮司が少し残念そうに
「なんや～ちゃうんかいな～　じゃあ未来ちゃんお知らせっていったいなんなん？
はっ　まさか抜き打ちテストや無いやろうな？
そんなんホンマにアカンでテストなんかされたら俺絶対赤点やわ～」
関西弁短髪男子生徒は少し青ざめた顔で担任二条未来に聞いてみると
「蓮司(れんじ)うるさいよ。　全く話が前に進まないじゃん。」
担任二条未来は呆れた顔で関西弁短髪男子生徒藤峰蓮司に指摘する。
「ゴメン、ゴメン。　で、未来ちゃんお知らせっていったいなんなん？」
関西弁短髪男子生徒不思議そうな顔で二条未来に聞いてみる。
「えーと入学式の時からずーと空いていた席があるでしょ。　ちょうど連司の前の
席今日からその席の子が来るから。」
二条未来は少し疲れた顔でクラス全員に伝える。　するとまた関西弁短髪男子生徒
藤峰蓮司は騒ぎだし
「ホンマか！！　ずーっと前の席空いとったからめっちゅ気になっ

とてん。
え？まさか女の子かいな」
などと騒いでいると藤峰蓮司の生徒の隣の席の女生徒が立ち上がり
「ちょっと！　蓮司少し黙って！　話が前に進まないじゃない。」
隣の席に座る女生徒ポニーテールで髪の色は少し淡い茶色長谷川美羽(みう)は
隣の席に座る藤崎蓮司に指摘し
「お～恐まじ美羽は俺の所のオカンより恐いで」
などと言うと他の生徒達がクスクスと笑いそんな事を言われた本人は顔を真っ赤に染め
「蓮司！アンタあとで覚えておきなさいよ！！」
と言い頬を膨らまし長谷川美羽は席に着きそれを観ていた二条未来は笑いながら
「うん　やっぱりいつ観てもあんた達二人の夫婦漫才は面白いよね。」
などと言うとクラスでどっと笑いがおきそんな事を言われた二人はかなり恥ずかしそうにし
「　先生！何で私がこんな奴と夫婦なんですか！」
長谷川美羽顔を真っ赤にし立ち上がり大声で言い
「そや、そや俺ももっとおしとやかな子がタイプや」
藤峰蓮司も立ち上がり反論する。
「ゴメン、ゴメン謝るから席に着いて。」
そう二条未来が言うと藤峰蓮司と長谷川美羽はしぶしぶ席に着いた。
「じゃあ、話がかなりそれちゃったけど話戻すね。」
二条未来がそう言うと廊下で待っている春樹に
「じゃあ志木(しきの)野君入ってきて。」
そう二条未来に言われると廊下でかなりの時間を待たされた春樹は
（やっとかよ。　あまりにも話が進まないから忘れられてるのかと思った。）
そんなことを考えながら春樹は教室のちょうど真ん中にある教壇の

傍に行き
担任の二条未来の横に立つ。
「じゃあ志木野君、自己紹介よろしく。」
担任の二条未来そう言いながら黒板に春樹の名前を書き少し横にずれ春樹は
教壇の前に立ち
「えーと志木野春樹(しきのはるき)です。　入学の手続きでちょっと
登校するのが遅くなりましたが。　今日からよろしくお願いします。」
春樹は「ペッコ」と頭を少し下げ自分の紹介を行った。
「志木野君は海外暮らしが長くて日本に帰ってくるのも十年振りらしいから
みんな仲良くしてあげてね。」
担任の二条未来があまりにも少ない春樹の自己紹介に付けたしそう言い
「じゃあ志木野君の席は真ん中の一番後ろの席の前の席ね。」
担任の二条未来にそう言われ春樹は指示さらた席に着き持っていたかばん
を机の横に掛けた。　席に着くとすぐに後ろに座る生徒から
「今日からよろしくな。俺は藤峰蓮司(ふじみねれんじ)や普通に
蓮司て呼んでくれ。　俺もお前の事春樹て呼ぶさかい。」
と言われた春樹は
「わかった　よろしく蓮司(れんじ)。　」
春樹はふっと自分の横の席を見ると空席だったので
「一つ聞いていいかな」
と後ろの席に座る蓮司に聞くと
「ええで。　どないしたん？」
と蓮司が答えたので
「俺の隣の席の子は今日は休みなのか？」
春樹がそう蓮司に質問してみると

「いやー悪い　俺ちょっと分からへんわ」
蓮司は少し気まずそうに答えたので春樹が不思議そうにしていると
蓮司の隣の席に座るポニーテールの少女が
「私は長谷川美羽。　気軽に美羽て呼んでね。
春樹君って海外から来たんだよね　何処の国からきたの？」
自己紹介をした長谷川美羽は目をキラキラさせ帰国少女春樹に質問してきた
（うーん・・・どうやって答えようかな）
と考えていると
「こらーそこぉ」
担任の二条未来が人差し指をビッシと春樹達の方へ向け
「その聞きたい気持ちも分かるけど、もう授業始めるからそうゆう質問タイムは授業終わってからにしてね。」
担任の二条未来がそう長谷川美羽に言うと少し残念そうにし机に置いてある
魔法学の教科書に視線を戻す。　それを確認した二条未来は自分の手元にある魔法学の教科書
を開き
「じゃあ昨日の続きの１６ページからやるね」
と担任の二条未来が言うとクラス中の生徒達も言われたページを開き教科書に目を通していき
春樹も言われたページを開き目を通していくが
（結構難しいな、俺こういう理論の話はよく分からないな）
など考えていると突然教室の前の扉が開き担任の二条未来が
「もう授業始まってるよ。早く席に着いて」
と言うと遅刻してきた生徒は
「ごめんなさい。」
と言い自分の席に向かう。春樹は目を通していた教科書から横目で隣の席を見ると
（他の席は全部埋まっていたから・・・あ～隣の席の奴か）

と考えこちらに向かって来る生徒の方を見ると生徒は長い黒髪に二重瞼で凄く

綺麗で大和撫子と言う言葉が凄く似合う少女

「冬野雪音(ふゆのゆきね)だった」

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

初登校そして出会い４

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

春樹の横の席の生徒は今朝登校中に出会った冬野雪音だった。
春樹は自分の席の隣の席に座った冬野雪音に小さな声で
「今朝はどうも。　一緒のクラスだったんだな。」
と言うと自分の席に座り魔法学の教科書を読みながら小さく頷いた。
春樹はこれ以上喋ってまた担任の二条未来にこれ以上怒られるのも嫌だったので自分の魔法学の教科書を読みながら
（彼女が入ってきた瞬間クラスの空気がちょっと変わったな）
春樹が教室を見渡すと少し気まずそうにしているが全員担任の二条未来の話を
聞きながら教科書を見ている者やノートに今聞いた話を書いている者春樹後ろの席
に座る藤峰蓮司、長谷川美羽の二人
も担任の二条未来が話す内容に耳を傾けながら教科書にも目を落とす。
春樹の自分の教科書に目を通すが春樹はこういう理論の話は得意では無かったので
若干ウトウトとしながら
（あ～こういう理論の話は俺じゃなくて秋人の得意分野だからな～）
とか考えていると眠気の誘惑には勝てず春樹の意識が教科書から離れ意識が飛んだ。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「おい、被験体（ひけんたい）２４号」
暗い通路を歩いていると後ろからそう声を掛けられ
「・・・・・・・・おいお前、俺をその番号で呼ぶな。　俺には春樹って言う名前がある。」
春樹が立ち止まり振り向かず声を掛けてきた男に言い返すと
「あ～わりぃわりぃ被験体２４号のは・る・き君」
その白衣を着た男はニヤニヤ笑いながら春樹を馬鹿にしながら言ってくる。
春樹は目力だけで人を殺せるような目でその男を睨みつけ
「・・・お前・・・口の利き方には注意しろよ・・・それ以上言うと俺も、あいつ等も黙っちゃいない。」
春樹が男にそう言うと春樹の事を馬鹿にしていた男が一歩後ろに下がり
「おぉ～こえぇ、こえぇ、そんな怒んなよただの冗談だよ。」
春樹が無視して行こうと思った瞬間に男が
「お前さんここから出て行くらしいな。　良かったな外の世界だぜ。」
男がニヤニヤして言うと春樹は
「・・・・どの道またここに帰って来るんだ全然良くは無い。」
春樹がそう答えると
「まぁ、そりゃそうかお前さんの帰れる場所はここしか無いからな。」
男が笑いながらそう言うと
「聞く話によるとかなり難しい任務らしいじゃねーか　まぁ死なない程度に頑張りな。」
男が笑いながら暗い通路の奥へと消えていった。
「・・・・当たり前だ。　こんな事で死んでたまるか・・・俺達は生きて
このクソみたいな所から出て行く。　そのためにも俺はあいつを・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

」

「こらー志木野春樹ーー」

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
☆☆☆☆☆☆☆☆☆

春樹はふっと目を覚まし声の発信源の方を見ると笑顔で俺の方を見ている担任の二条未来が居た。
「君ねー私の授業で居眠りするとは度胸あるね。」
担任の二条未来がこれでもかという笑顔で春樹の席の方へと歩いてくる。
だがその瞬間に一時間目の終了のチャイムが鳴り響き担任二条未来は
少し残念そうに
「春樹、次居眠りしたら教育指導だからね」
担任の二条未来はその一言を残して職員室へと帰っていった。
(教育指導てただの暴力だろ　てか志木野君からいつのまにか呼び捨てになってるし。)
春樹は深いため息をつくと後ろの席の蓮司が笑いを堪えるように
「春樹お前エライ怒られたな。」
蓮司は笑いを堪えられなかったようでゲラゲラと笑っている。
「俺初めて見たで未来ちゃんの授業で寝てるやつ　ほんま凄い度胸やで。」
蓮司がそう言うととなりの席の長谷川美羽も
「ほんとだよ。　春樹君二条先生ああ見えても凄く怖いんだよ。
他のクラスの子が言ってたんだけど校内で禁止されてる魔法使っての喧嘩をしたらしいんだけどそれを見つけた二条先生が鬼の形相で走っていって
魔法使わず体術だけで喧嘩してた2人を止めたって噂もあるから春

樹君も気よつけた
方がいいよ。」
そう長谷川美羽が言うと春樹は
「そりゃ怖いな　これからは気よつけるよ。」
そんな会話を三人で行っていると春樹の席の前にクラスの生徒達が
集まってきて
各々の自己紹介をしだした。
「私夕美宜しく　夕美ちゃんて呼んでね
とか
「志木野君って外国から来たんだよね何処の国から来たの？」
とか
「志木野君って彼女とか居るの？」
とかそれぞれに春樹に言ってくる
「ちょっと待ってそんなに一斉に言われても答えられないから」
春樹は少し困った顔をしているといいタイミングで次の授業のチャイムが
なり響いて春樹の席の前にいた生徒も少し残念そうにそれぞれの席へと戻って
行き春樹は心の中で一つため息をつきふっと隣の席を見ると一時限目の授業が
終わっていつのまにか居なくなっていた冬野雪音もいつのまにか帰ってきていた。
この学校では通常の授業も行われる。　その内容は普通の高校生が習うのと同じだか
この学校は一応超が付くほどの優秀校だから内容もかなり難しくこういう勉強があまり
得意ではない春樹は二時限目から四時限目の通常授業に頭を悩ました。

ようやく四時限目の終了のチャイムがなり春樹は自分の髪の毛をく

しゃくしゃとし
（まさか授業がこんなにも難しいなんて　テストの時どうしようかな・・・）
とか考えていると後ろの席に座る蓮司が
「春樹、昼飯どうするんや？」
と春樹に尋ねると
「いやまだ何も考えていないな。」
そう言うと蓮司が
「じゃ一緒に食堂へ飯いこか。」
春樹は少し考え
「そうだな。」
と言い席から立ち上がり教室から出た。
食堂までは教室からすぐに付き扉を開けると結構混んでいて
「結構混んでんな～　どっか席空いてへんかな」
と二人で食堂内を歩いていると
「蓮司」
と声を掛けられ二人で振り返るとそこには金髪の生徒が手を上げている
「おぉロイやんか　ちょっと何処も席空いてへんから席合い席でもかまわへんか？」
と尋ねると
「あぁいいよ。」
と言うと机の上に置いてあった荷物を片付けその間に春樹と蓮司は食事を買いに行き
金髪生徒の所に戻ってくると机は片付けられていたが春樹達を待っている人数が増えていた
春樹が机に着くと
「ゴメンね春樹君何処も席空いてなかったから合い席させてもらうね。」
長谷川美羽はそう言うと胸の前で手を合わせて言ってきたので

「全然大丈夫だよ長谷川　俺達も合い席させてもらってるから」
春樹がそう言うと長谷川美羽が少し膨れ面で
「美羽」
と一言いい
「朝言ったでしょ　美羽て呼んでって」
そう春樹に言うと
「あ～ゴメンえーと　み、美羽」
春樹が少し恥ずかしそうに言うと美羽は嬉しそうに
「うん　よろしい」
そんなやり取りをしていると春樹の前に座る金髪生徒が
「俺は岡崎ロイ。　春樹宜しく。」
春樹は一つ疑問に思ったので
「日本人じゃないのか？」
と、尋ねてみると笑いながら
「あぁ俺アメリカ人とのクォータなんだ。　まぁ顔は殆ど日本人で髪の色だけ受けついたんだ」
春樹は納得した顔で
「なるほど分かった　じゃあこれからよろしくなロイ」
とロイの前に右手を差し出した。それを見ていた蓮司が
「良かったな春樹これで友達三人目やで　じゃあそろそろ飯でも食べようや」
蓮司が今日の昼御飯のカツ丼を食べようお箸を持った瞬間
「ちょっと！お待ちなさい！」
同じ席に座っていた少女が突然立ちあがった少女はとても綺麗な金髪で
縦ロール白人特有の綺麗なブルーの瞳少女
「わたくしまだ自己紹介が終わっていませんわ」
と、お昼のカツ丼を食べようとしていた蓮司にびしっと一指し指を向け
「わたくしの自己紹介が終わるまで食事はお待ちなさい」

と、言い蓮司は不思議そうに
「なんやレイラお前まだ自己紹介してへんかったんか。えーと春樹こいつはレイラや　良し自己紹介も終わったし飯にしよか。」
蓮司は再び自分の丼に手をかけ食べようとしたので
「なんでそんな適当な自己紹介なんですの！」
と小女が怒りながら蓮司言うと
「いやぁでもはよ食べな御飯固なってまうで。」
と蓮司が言うので小女は
「はーもういいですわ　先に食べてくださいな。」
と蓮司に言うと
「じゃ先に食べさせて貰うわ。
と自分の丼に入っているカツ丼を食べだした。
春樹、美羽、ロイは完全に食べるタイミングを無くし小女が自己紹介を始めるの待っていると蓮司の方を見ていた小女がこちらに振り返り右手を腰に当て
「わたくしレイラ・ハーゲンボルトですわ。　イギリスの貴族ハーゲンボルト家の次期当主ですわ。」
と、自身たっぷりに自己紹介を行ってきた。すると横で一人お昼を食べていた蓮司が食べるのを止め
「なぁレイラお前がようゆうとるハーゲンボルト家って言うのは一体なんなんや？」
と言うと春樹、美羽、ロイの三人は呆れて
「あんた、本当に知らないの？」
と美羽が呆れて聞き
「蓮司僕でもハーゲンボルト家は知ってるよ」
とロイも呆れ
「そんなん言われても知らんもんは知らんからな。　春樹お前は知ってるんか？」
と春樹に尋ねると
「当たり前だ。　勉強が出来ない俺でもそれくらいは知ってる。」

春樹も呆れて言うと
「まじか皆知っとるんか・・・」
と、少し寂しそうに答え
「それでハーゲンボルト家っていうんは何や？」
と、蓮司が言うとレイラは少し嬉しそうにし説明しようとした瞬間
春樹が
「ハーゲンボルト家って言うのはイギリスの五大貴族の一家だよ。」
春樹が答えると前に座っていたレイラが
「なぜあなが説明するんですか。」
と、ちょっと怒りながら言っているが春樹はさらりと流し話えお続
ける。
「イギリスの女王エリザベスを守る五枚の盾、ハーゲンボルト家は
その中
の一家だよ。」
と、説明するとレイラも納得したかのようにうんうんと首を頷いて
いる。
「と、言うことはレイラお前貴族やったんか！」
蓮司はカツ丼を食べる事も忘れてびっくりしているようだ。
「そうですわ。　わたくしは絶対にこの学校を卒業して女王陛下を
守れる
様な強い騎士になります。　それがわたくしの夢ですわ。」
と、レイラは満面の笑みを浮かべ春樹達に語った。
「じゃあ俺も自己紹介しとくか　俺の名前は志木野春樹だレイラよ
ろしくな。」
春樹が笑顔でレイラに言うとレイラは少し恥ずかしそうにし
「こちらこそよろしくお願いしますわ。」
それをみていた美羽が
「良かったねレイラ春樹君と友達になれて。」
と、言い
「レイラ休み時間とかもずっと春樹君の喋りたそうだったもんね。」

と、言うとレイラは顔を真っ赤にして
「み、み、美羽なんて事をいってますの　そ、そ、そんなわけありませんわ。」
と、言うと美羽はくくと笑い
「あれーそうだったけ」
と二人でやりとりをしているの横目に春樹とロイは完全に伸びたラーメンを
食べる。すると予鈴のチャイムが食堂に鳴り響き他の生徒達も教室へと戻って
行くので春樹達も教室に戻るため自分達が座っていた机の上を片付け教室に
戻ろうと思ったとき春樹がふっと思い出し
「そういえば日本にも魔術師の有名な一族があったよな。」
と、言うと
「いや俺は知らんわ。　じゃあ急ぐから先行くわ」
と蓮司、美羽、ロイは先に教室に戻っていった。残された春樹とレイラは
不思議そうに顔を合わせ少し考えたあとで教室に戻って行った。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

初登校そして出会い４（後書き）

今回は少し長めになります

初登校そして出会い5

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

昼食が終わり午後最初の授業は魔法の歴史の授業で春樹はこの手の授業も得意では無いので
全く授業に関係無いページをペラペラとめくったりしていると、昼食後と言うこともあり
急激な眠気に襲われふっと気づくと授業も終わり次の授業の為の準備を行っていた。
（うん？　なんだ移動授業か）
と、覚醒したばかりの頭で考えていると春樹の後ろの席に座る蓮司（れんじ）が春樹の右肩を
ポンと叩きながら
「春樹お前授業中ずっと寝とったな」
後ろの席に座る蓮司がニコニコした顔でそう言ってきたので
「あぁ　俺昔からこういう頭の使う授業は得意じゃないんだ」
春樹は寝起きの顔で頭を掻きながらそう言うと
「まぁ別に俺はええねけどあんま授業さぼっとたら指導受ける破目になるぞ」
連司がそう言うと蓮司の隣の席に座るポニーテールの少女長谷川美羽も
「そうだよ、春樹君この学校そういうの結構厳しいから度が過ぎると退学もあるから気よつけてね。」
と美羽が少し心配そうな顔で言ってきたので
「ああ　これからわ気よつけるよ。」
春樹はそう笑顔で言うと美羽は顔を少し赤くし下を向きながら
「ままぁわかってるなら　いいんだけど。」

そう言うと美羽はそそくさと教室から出て行ってしまった。
春樹と蓮司は
「なんや　あいつ」
「さぁな」
と二人で言ってると蓮司が何かを思い出したようで
「そや次の授業移動授業やねん」
そう言うと蓮司が移動授業の準備をしだし
「春樹はよう準備せえよ」
蓮司あ荷物を持ち教室から出ようとしたので
「待て、蓮司次の授業てなんだよ？」
そう言うと教室から出ようとしていた蓮司が立ち止まりこちらに振り返り
「何をゆうとんねん　朝のＨＲの時未来ちゃんゆうとったやん」
蓮司がそう言うので春樹は少し考え
「何が？」
と、春樹が不思議そうに言うと蓮司が呆れた顔で
「次の授業は魔力検査と身体能力検査やぞ」
と、蓮司が言うと
「・・・・あ〜魔力検査ね」

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「魔力検査」
と、は入学して一番最初に受けるテストであり、主に潜在魔力検査、属性魔力検査、身体能力検査
の三つに分けられる。
{潜在魔力検査」
とは自身の中にどれだけの魔力があるのかを検査する物でこちらの検査結果は生徒に

は説明される事はない。
「属性魔力検査」
基本使用できる属性は一つでありこの検査で得られた情報で自分の属性を鍛えていくことになる。
「身体能力検査」
現代の魔法は魔法結晶石（まほうけっしょうせき）を使い魔術を使うので弾切れの状態になる事もあるのでいざ戦闘の時近魔術を使わない近接戦闘も行える様に主に体力検査などが行われる。
主にこの三つの検査に分けられこのテストであまりにも低い数値を出してしまうと退学になる事もある。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「春樹そんなぼーっとして授業遅刻してもうたら未来ちゃんに雷落とされまう急ぐぞ」
と、言うと蓮司は教室から出て行ってしまったので
「はぁ～魔力検査とかイヤだな」
と、ぶつぶついいながらも春樹を教室から出て蓮司の後を追いかけた。
「おい蓮司待てって　俺何処でテストするとかしらないんだから。」
春樹が走りながら蓮司の後ろからそう言うと蓮司は走りながら
「えーとっなテスト受ける場所は入試試験の時に模擬戦闘のテスト受けた場所や」
と、蓮司が言うと春樹は同じく走りながら考え
「あぁ～あそこか」
と、言うと春樹は突然蓮司とは別の道へ行き
「おい、おい春樹お前どこへ行くんや」
と、蓮司は叫んでいるが春樹は無視し

「階段から言った所で絶対に間に合わない。　だったらショートカットだ。」
春樹はそのまま走り渡り廊下に着くと他の生徒もいたがそれも無視しそのまま
の勢いで二階から飛び降りまるで何事も無かったかの様にそのまま走り抜ける
それを観ていた生徒達は
「へ？今のなに？」
女生徒が隣にいた女生徒に聞くと
「・・・イヤわかんない。」
二人の女生徒達は唖然としている。まぁその通りである。　いきなり男子生徒が走って
きてそのまま二階から飛び降りたのだからそれはビックリするだろう
春樹はそのままの勢いで走りすれ違う生徒達には驚きの目で見られるがその視線を無視
し春樹はギリギリで検査が行なわれる部屋にたどり着いた。
春樹がぜぇぜぇと肩で息をしていると春樹に気が付いたロイが近づいてきて
息が上がっている春樹をみて不思議そうに
「春樹なんでそんなに検査の前からばててるの？」
そんな事を聞いてきた春樹は心の中で
（こいつこんなにバテバテになったのはお前らのせいだろ）
と、ロイに言ってやろうかなと思ったがそこはグッと我慢しその言葉を飲み込み
「いや間に合いそうになかったからちょっと走ってきた」
と、言うと明らかにばててている春樹の姿をもう一度見て
「そっかそっか春樹は面白いな」
と、ロイが笑いながら言ってきた。　春樹は心の中で
（全く笑い事じゃないんだがな～」
と、思っているとロイが

「そういえば春樹、蓮司はどうしたの？」
と、ロイが春樹に聞いてきたので春樹は少し考え
「さぁ俺は遅刻しそうになったから走ってきたからな　蓮司は知らないな」
と、春樹が答えるとロイは
「ふーんそっか蓮司ついていないな二条先生に怒られるよ」
と、ロイはそう言うと蓮司が二条に怒られるシーンを想像したのか手を口に
持っていき一人で笑っているおそらくこの会話を聞いていなかった人間が見ると
かなり怖いだろう金髪の男子生徒が一人で笑っているのだから
「そういえばロイ検査ていうのは制服のままでいいのか？」
と、一人で笑っているロイに聞くと
「え？あぁ身体能力検査の時は着替えるけど魔力検査の時は制服で大丈夫だよ。」
まだ顔は笑っているがそうロイが言ってきた。
春樹は
「ふーん」
と、答え周りをクルット見回し他の生徒を見ると金髪縦ロールの小女レイラと
目が合い春樹は目をそらすと金髪縦ロールのレイラがこっちに歩いてきて
レイラお得意のいつものポーズ左手を腰に当て人差し指をこちらへビシット
向け
「ちょっと！何で目をそらしますの」
と、春樹の前に立ち少し怒った顔でそう言ってきた。
「いや、目をそらしたわけじゃない。」
と、春樹が答えるとレイラはまだ不満があるのかまだなにかぶつぶつ言ってくる。

春樹は「はぁー」と、ため息を付くと覚悟を決めレイラに二条が来
るまで永遠と
ぶつぶつと言われ続けた。
二条が部屋に入ってきて検査の説明をしていると息を切らした蓮司
が部屋に入って
きて二条に
「蓮司これで遅刻2回目だから今日検査終わったら指導室行きね。」
と、二条に言われ蓮司は呆然としていた。
それを見ていた春樹は
「蓮司すまない」
春樹は小さな声で蓮司に謝った。
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

初登校そして出会い５（後書き）

少し更新が遅れました

魔法力検査と模擬戦１

☆☆

担任の二条未来に指導室行きを言い渡され最初こそは呆然としていた蓮司(れんじ)だったのだが直ぐに立ち直り今は春樹の横でブツブツと小さな声で文句を言っている。

「春樹お前一人だけ助かりよって。　あんなもん裏切り行為やぞ。」

蓮司が春樹にそう言うと春樹は表情を変えず担任の二条の方を観ながら

「何が裏切りなんだ。」

春樹が二条の話を聞きながら小さな声でそう言うと

「何がって・・・よぉ言うは自分一人だけ助かって俺一人だけ指導室行きやで」

自分でそんなことを言ってまた肩を落としている。　それをみた春樹は一つため息を付き

「はぁー．わかったよ今度何か奢るからそれで許してくれ」

春樹が蓮司にそう言うと今まで肩を落としてた蓮司がこちらをちらっと見て

「ほんまか？」

と、さっきまで肩を落として呆然としていた蓮司が少し嬉しそうにして言ってくる。

「あぁ本当だ。　その変わり安いランチだけだからな。」

と、蓮司に言うと

「わかった。　しゃあなしそれで許したるわ。」

春樹は現金な奴だなと思ったが声に出さずまた一つため息をついた。

蓮司の文句も一段落し二条の話を聞こうと思いそちらへ耳を傾けた

がどうやらもう話が
終わりそれを聞いていた生徒達も検査の準備を行っていた。
「じゃあ最初は「潜在魔力検査(せんざいまりょくけんさ)」からだから皆こっち
に来て。」
担任の二条に言われ全員二条に付いて行くと広い部屋に全員入れら
れるとそこには
巨大な魔法結晶石(まほうけっしょせき)があった。
普通魔道師が持っている魔法結晶石は小石程度の大きさなのだがこ
こにある魔法結晶石
は岩位の大きさであった。全員が呆気に囚われていると二条が
「じゃあ皆この魔法結晶石に一人ずつ手を触れていってそれだけで
潜在魔力検査は
終わりだから。」
と、二条が言うと前で聞いていた生徒達から順番に触れていく春樹
は一番後ろで聞いていた
ので春樹は一番最後に巨大な魔法結晶石に触れる。　そうすると何
かに自分の中を見られる
様な感覚に襲われたがすぐに終わり時間にしたら約１０秒位だった。
最後の春樹の検査が終わると
二条が
「じゃあ全員魔法結晶石に触れたよね。じゃあ次は「属性魔力検査(ぞくせいまりょくけんさ)」
だから付いて来て。」
と、二条は言うと巨大魔法結晶石だけ置いてある部屋を後にする。
その部屋から出ると次はすぐ隣にある部屋に連れて行かれ
「じゃあこの部屋では君たちの属性を検査するから。　じゃあ検査
の前に
これを皆に渡すね。」
と、二条が全員に言うと先き程から持っていたアタッシュケースを
床に置き
なにやらパスワードみたいなのを入力をする。　するとアタッシュ

ケースは
「カチャ」という音を出し開くするとその中から大量の魔法結晶石が入って
いる。
「じゃあ皆良く聞いてね今から渡すこの魔法結晶石は在学中に紛失とかしても
代わりが無いから絶対に失くさないようにもし失くしたら退学だから。
気おつける事。」
と、二条が説明を終えると生徒一人、一人に魔法結晶石を手渡してくる。
それが全員に渡ると二条は
「じゃあ今から属性検査するから皆集合して。」
と、二条が言うとそれまで今渡された魔法結晶石を貰って喜んでいた他の
生徒達も二条の元に集まってくる。
「じゃあ検査の前に魔法技師の赤峰（あかみね）技師を紹介するね」
と、言うと一人の女性が部屋に入ってきた。その女性は黒髪ショートに
眼鏡をかけ身長はおそらく１７０ｃｍはあるだろう年は見た感じ２０代
後半くらい二条に比べたらかなり大人ぽい
「えーと今二条先生に紹介された赤峰です。　一応この学校専属技師です。　皆さんよろしくお願いします。」
と、深々とお辞儀をしてきた。そのあまりにも深々ちしたお辞儀だったので
何人かの生徒は釣られてお辞儀をしている。
「じゃあ皆今から属性検査するね。　じゃあ赤峰さんここからはお願いします。」
と二条が言うと魔法技師赤峰が全員の前に立ち

「じゃあ皆さんの魔法結晶石に皆さんの魔力を魔法結晶石に変換しますので
こちらに一人ずつ並んで下さい。」
と、赤峰が言うと他の生徒達が一列に並んでいく春樹がその列の一番最後に並ぶと
一番前の生徒から属性検査が行われていく。
ちなみにこの「魔法技師」とは現代魔法は魔法結晶石が無いと使えない為自身の
魔力を魔法結晶石に変換する必要がある。　だがこの変換作業は個人が簡単に使う
事は出来ず専用に魔法技師の元に持って行く必要がある。
魔法結晶石の変換を待っていると最初に変換作業終えた長谷川美羽（はせがわみう）が俺の前に
来て
「あ、春樹君聞いて聞いて私の属性風だったんだ。」
美羽が嬉しそうにそう春樹に言ってくる。　ちなみに風属性と言うのは全然
珍しく無い。春樹が「おぉ良かったな」と、答えると「いいでしょ。羨ましい
でしょ」と、満面の笑みで言ってくるが適当に「あぁ」と、言っておいた。
美羽の自慢話が終え順番を待っていたら次はロイが春樹の前に来て
「あ、いい所にいた春樹聞いてくれ俺の属性水だったんだよ」
と、ロイが美羽の同じテンションで言ってきた春樹は美羽の時みたいに
適当に答えた。
また、順番を待っていた春樹の前に次は蓮司が現れ
「お、春樹やないか、聞いてくれ俺の属性火やってんええやろ。」
蓮司が自慢げに言ってきたがまた同じく適当に答えた。
次は金髪ロールのレイラが現れ左手を腰に当て右の人差し指をこち

らに
向け
「あ、春樹さん聞いて下さい。わたくしの属性雷ですわ。このわたくし
に一番合う属性ですわ。」
レイラがブルーの瞳をキラキラさせ春樹に自慢してくる。春樹は適当に
答えたがどうやらそれがばれたらしく
「なんですのその適当な返事は」
レイラがぶつぶつと文句を言ってきた。その時前でなにやら歓声が上がった
春樹が何だと思って前を見るとそこには冬野雪音(ふゆのゆきね)が居た。
何があったのかと前に並んでいたクラスメイトに聞くと
「え、なんか冬野さんが属性変換したらしいんだけどなんか見た事の無い
属性だったの。」
と、前に居た女生徒が答えた。
「それはいったいどんな属性だったんだ。」
と、春樹が女生徒に尋ねると
「えーと氷の属性だったらしいよ」
と、答えたその答えに春樹は
(氷だと・・・と言う事は日本が誇る四季の一族か・・・それだったら
納得がいくな。)
「四季の一族」
とは日本の最古の魔術師の一族である。その使用する魔術は一族のみに伝わる
魔術であり他の者は一切使用する事は出来ない。
春樹が難しい顔で考え事をしていると
「志木野君　志木野君」

と、呼ばれ
「あ、はい」
と答えると春樹の前にはもう誰もいなく次は自分の番だった。
春樹が赤峰の前に行くと
「じゃあ、あなたが最後ね志木野君魔法結晶石に魔力を込めてみて」
と、言われた春樹は魔法結晶石に魔力をこめるとバチバチといいだし
「志木野君の属性は雷ですね　じゃあこのまま魔法結晶石に変換するから
ちょっと待って下さいね。」
赤峰がそう言うと作業をしだしたので春樹は赤峰の方を見ながら
（作業はかなり早いな、ランクは二条と同じ位か・・・）
と、考えていると
「はい。完了しました。どうぞこれが志木野君の魔法結晶石です。」
と、言われ魔法結晶石を渡されたので春樹は
「ありがとうございます。」
と、一言だけ表情を変えずお礼を言った。それを赤峰の後ろで見ていた二条が
「じゃあ皆変換作業終わったよね。　まぁ皆はこれから三年間は赤峰さん
にお世話になると思うからちゃんとお礼言っとく事」
と、言われた赤峰は赤面し
「いやいやいいですよえーと皆さん私は学校校内の６番地区でお店出して
ますので補充の時とかはよろしくお願いします。」
赤峰はそれだけ全員に伝えると部屋から出て行った。
「じゃあ皆最後の検査に行こっか、最後の検査はここじゃなくて外でやるから
付いて来て。」
二条はそお言い全員二条の後を付いて行くとグラウンドの方へと向かった

どうやら次の検査はグラウンドで行うらしい
グラウンドに付くと二条の説明が始まった。
「えーとここでは普通の高校と同じで皆には今から１００ｍを全力で走ってもらうね。
とりあえず皆の体力が今どれだけあるかの検査だから。　まぁまだ色々検査も残ってるん
だけど今日は時間もあまり無いからこれで最後」
と、二条が言うとそれを聞いていた女生徒達が
「先生私達スカートなんですけど」
と、言う最もな反論が出てきた。それを聞いた二条は
「先男子の方からするから女子は着替えてきて。」
と、二条が言うと
「わかりました。」
と、言い女子達は着替えに教室へと戻って行った。
「じゃあ男子から走ってもらうね。」
二条はストップウォッチを出しスタートラインへ行くと
「時間も無いし五人ずつでお願いね。」
と、言われた男子達は全力で走って行った。そして最後の
走者は春樹、蓮司、ロイ、の三人だったので蓮司の思いつきで
一番遅かった奴ジュースおごりという新ルールが作られ負けるのがいや
だった春樹は少し本気で走りゴールするとかなりの好タイムだったらしく
おぉーと言う声が上がった。　ちなみにこの賭けの敗者は蓮司で春樹、ロイ
にジュースをしぶしぶおごっていた。

今日の検査が全て終わり寮に戻り夕御飯を済ませ自分の部屋に戻り明日の

準備を行いふっと思い出し春樹は制服のポケットにいればなしだった魔法結晶石
を取り出し少し眺め自分の机の上に置いた。その傍には別の魔法結晶石が二つ
置いてあった。

☆☆☆

魔法力検査と模擬戦１（後書き）

ここにきてやっと魔法が出てきます。　まだ使用はしませんが・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4099z/

魔法世界と高校生

2011年12月26日01時46分発行